

保育士養成校でのグループワークによる虐待認知の変化 —身近な事例を用いたロールプレイングでの検討—

久米喜代美¹⁾・宮村りさ子²⁾・塩澤 史枝¹⁾・森 和代³⁾・石川 利江³⁾・江藤志穂美⁴⁾

¹⁾ 桜美林大学 健康心理・福祉研究所

²⁾ 東京成徳大学 応用心理学部

³⁾ 桜美林大学

⁴⁾ 相模原市健康福祉局こども育成部 中央こども家庭相談課

The changes for cognition of child-abuse by group social work in childcare academies - The studies with the use of role playing method for the possible case -

Kiyomi KUME ¹⁾, Risako MIYAMURA ²⁾,

Fumie SHIOZAWA ¹⁾, Kazuyo MORI ³⁾, Rie ISHIKAWA ³⁾, Shihomi Eto ⁴⁾

¹⁾ Health Psychology and Welfare Laboratory, J.F. Oberlin University

²⁾ Faculty of Applied Psychology, Tokyo Seitoku University

³⁾ College of Health and Welfare, J. F. Oberlin University

⁴⁾ Sagami-hara city office, Central Child and Family Counseling Division

キーワード：虐待認知, ロールプレイング, グループワーク

抄録：本研究では、保育養成校に通う学生を対象に、身近な事例をロールプレイングで再現し、グループワークの効果を検討することを目的とした。検討の詳細は、①学生群のグループワーク前後の比較、②社会人群のグループワーク前後の比較、③学生群と社会人群グループワーク変化量の比較、④ロールプレイング群演者の検討、⑤テキストマイニングの検討を行った。その結果①では、「心理的虐待」は有意な傾向であったものの、「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」における虐待認知は変化したことが明らかになった。さらに、④では「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」における虐待認知の変化が確認できた。しかし、②では7割が子育て中の母親であることも踏まえ、全ての因子が認められなかった。また、グループワークの効果を確認するために検討した③では、学生群は社会人群に比べて有意な傾向であったが、明

確な効果は得られなかった。この研究で共通して明らかになったことは、「心理的虐待」にグループワークにおける虐待認知の変化が認められなかったことが示された。今後は、「心理的虐待」の認知に働きかけるグループワークプログラムの開発が必要である。

I. 問題と目的

我が国では、1994年に「児童の権利に関する条約」が批准され、子どもは保護・養育の客体ではなく、権利行使の主体としてその人格と主体性を尊重され、調和のとれた成長発達が保障されるべきであるとの認識により、子どもの権利擁護のための取組が展開されてきた。子どもが心身共に成長していくには親をはじめとする大人の愛情や保護を受けることが必要であるが、子どもの年齢が低ければ低いほど、子どもは自らの意向を表明することができず、周囲の大人の意向や態度に大きく左右される。とりわけ、保護者からの虐待や不適切な養育を不当な権利侵害と認知したり、子ども自身の力で避けることはきわめて困難である。保護者から受ける虐待や不適切な養育が、子どもの心身の成長発達過程や成人に達した後の生活にまで多大な影響を及ぼすことから、これらは最も深刻な子どもの権利侵害と言える。したがって、子どもの成長過程を周囲の大人が見守っていくこと、虐待について理解しておくこと、できるだけ早く虐待に気づき早期対応に繋げることなどについて、より多くの人に理解を求めることが子どもの権利擁護の重要な基盤づくりとなる（厚生労働省、2013）。つまり「児童虐待は人権侵害である」と明記されたことで、その後の子ども虐待対策に大きな影響を与える結果となった。東（2006）は、保育所で今以上に被虐待児童を発見することができれば、児童の権利保障をより確実に行うことができると述べている。このことから、児童虐待の予防や早期発見のためには児童虐待に関する意識を高めることが重要である。

このような状況の中、2016年厚生労働省の発表によると、2015年度中に全国208か所の児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は103,260件（速報値）であり、これまでで最多の件数となっている。虐待の内容別では、暴言や無視、きょうだい間の差別的な扱いなどの「心理的虐待47.2%」が急増し、半数近く占める割合であった。「身体的虐待27.7%」「ネグレクト23.7%」も前年度より増加した一方「性的虐待1.5%」は横ばいであった。2013年より「心理的虐待」が「身体的虐待」を上回る比率となっている。このように児童虐待の4つの定義が挙げられているが、その行為の程度、頻度については言及されていないため、虐待とみなす客観的基準は必ずしも明白ではない。よって児童虐待と躰との区別が曖昧でこの程度の違いには個人差があるため虐待を認知することが重要である。中嶋（2005）は、「虐待認知」を、ある人がある行為を、虐待とみなすかどうかという認知のことを意味するとして、虐待認知の実態を把握することが求められていると指摘している。

平成21年4月に改定された保育所保育指針によると、「保育現場は、子どもの心身の状態や家庭での生活、養育の状態等が把握できる機会があるだけでなく、保護者の状況なども把握することが可能で保護者からの相談を受けたり、支援を行うことにより、虐待発生の予防的機能も可能にする」と虐待の予防・早期発見等の対策として謳われている。また、虐待等の早期発

見や専門機関・地域との連携が求められている。つまり保育現場は、児童虐待を発見する場所として重要であることから、児童虐待に対して保育士の役割が明確になっている。虐待防止の担い手となる専門家をいかに養成するかという課題は解決の急がれる重要な課題でありながら、保育士を対象とした研究は非常に少ない(笠原, 2009)。特に虐待認知に関する研究では、専門家や保護者を対象に検討しているが、保育士養成校での検討はほとんど見当たらない。

宮村(2014)が行った、児童虐待防止に関する講演とグループディスカッションでの虐待認知の取り組みでは、「性的虐待」と「心理的虐待」の虐待認知は変化したが、その対象者は一般の学生や専門職であった。また、中嶋(2005)による児童相談所職員、保育士、保護者を対象とした児童虐待の認知の研究では、保護者と保育士は、即座に子どもに影響を及ぼさない軽微な虐待行為を虐待とみなしにくく、保護者については、虐待とみなしやすい人とそうではない人に分かれること報告している。さらに、保育士は保護者と似た捉え方であることが見られた。

このような背景も踏まえ、保育現場では虐待が疑われる児童が予測されることから、将来保育士を目指す学生への調査に意義があると考えられる。また、グループワークの意見交流は、主体的に虐待認知を検討する上でも重要であると考えられる。さらに、身近な事例を用いたロールプレイングで再現することで、書面や口頭よりリアルな場面が想定できる。ロールプレイングは2011年、文部科学省の中央教育審議会において、養成校における授業内容に専門性を高めるために導入することが求められている。植草ら(2012)は、保育に対する基本的な心構えをつくることに有効であると報告している。つまり、ロールプレイングは様々な役割を通して自分や相手の気持ちに気づくという側面がある。

そこで本研究では、保育養成校に通う学生を対象に、身近な事例をロールプレイングで再現し、グループワークの効果を検討することを目的とした。

II. 方法

1. 期間・対象者

2013年～2016年に、保育士養成校での必修科目である「児童家庭福祉」を受講し、記入漏れや記入ミスの回答を除外した学生を対象とした。

1) 学生群

保育士養成校(A 専門学校)の学生33名(男子13名, 平均年齢18.23歳, 女子20名, 平均年齢18.45歳)を対象とした。学生数が少ないため、2013年～2015年にわたる3回分の測定結果を合計した。その内訳は、2013年17名(男子7名, 女子10名)、3グループに分かれてワークを行った。2014年8名(男子3名, 女子5名)、2グループに分かれてワークを行った。2015年8名(男子3名, 女子5名)、2グループに分かれてワークを行った学生を対象とした。

2) 社会人群

保育士養成校(B 専門学校)の学生20名(女子20名, 平均年齢32.05歳)、4グループに分

かれてワークを行った社会人学生を対象とした。7割の社会人学生が子育て中である。

3) ロールプレイング群

学生群の2013年2014年2015年と社会人群より、各4名合計16名(男子3名、平均年齢18.00歳、女子13名、平均年齢23.35歳)の演者希望者を対象とした。

2. 調査内容

グループワークによる虐待認知の変化を測定するために、中島(2005)が作成した、虐待認知の尺度を利用した。この指標は、高橋ら(1995)の虐待認知の尺度を参考に作成されている(中島, 2005)。グループワークの行う前後の効果に、43項目から構成される4因子「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」「心理的虐待」を尋ねた。教示は「一般的に親が子どもに対して行う関わりについての文章が並んでいます。あなたの目からみて、それぞれの項目が虐待だと思うのか、特に問題はないと思うのかをおたずねします」とした。「特に問題がない」(0点)、「不適切だと思うが、虐待ではない」(1点)、「頻繁に起こっていれば、虐待だと思う」(2点)、「時々起っていれば、虐待だと思う」(3点)、「1回でもその行為は虐待だと思う」(4点)の5段階評価で評定を求めた。

3. 調査方法

グループワークの内容は、宮村(2014)の「地域住民が会える児童虐待を心配する場面の事例」を基にグループワークの検討を行った。その事例は「バスの中で騒ぐ兄妹、母親は兄の服を掴み大声で怒鳴った」というシーンをロールプレイングで再現した。その際、気になるチェックポイントをいくつか提示し、KJ法について説明した後、各グループで司会・書記・タイムキーパー役を決め、カテゴリーにまとめてグループごとに発表した。90分間筆者が担当した。ロールプレイングの演者は、ナレーション役、母親役、兄役、妹役と4名の演者希望者を募り、小道具(携帯・おもちゃ)を用意し、打ち合わせ後、ロールプレイングで再現した。

4. 分析方法

グループワークによる虐待認知の前後の変化を測定するために、学生群・社会人群・ロールプレイング群に t 検定を行った。さらに、学生群と社会人群のグループワーク介入前後の変化に違いが見られるかを検討するために、変化量を一要因分散分析の検定を行った。なお、分析には、SPSSver23を用いた。

KJ法から得られた意見を、釜賀(2015)のテキストマイニングの手法を参考に分析を行った。

5. 倫理的配慮

調査の目的、データの管理と処理方法、プライバシーの保護について口頭で説明し、調査が強制ではないこと、成績とは関係がないこと、回答によって不利益にならないことを説明した。さらに、調査結果の報告を行い、回答する学生の権利を守ることに留意した。

地域住民が会う児童虐待を心配する場面の事例

ある日、バスに乗っていると、親子連れが乗ってきて隣に座った。お母さんは若くて、茶髪にミニスカート姿で、ハイヒールを履いている。子どもは5歳くらいのお兄ちゃんと、3歳くらいの妹。二人とも今流行りの子ども服を着ている。

バスが動き出すと、子どもたちは楽しくて仕方ないようで、じっと席に座ってられず、「キャッ、キャッ」と声を出してはしゃぎ、席を立ち上がる。お母さんは携帯を片手に、子どもたちをチラッと見て「ちゃんと座ってろ」と叱った。

子どもたちは少し静かになったが、しばらくして、お兄ちゃんが妹の持っていたおもちゃを取りあげて、ふざけはじめた。お母さんは、「おい、何してんだよ」と低い声で注意したけど、お兄ちゃんは聞かない。とうとう、妹が「返して〜」と泣き出した。すると、ずっと携帯をいじっていたお母さんが手をのばし、お兄ちゃんの服を掴んで、思いっきり引っぱった。そして、「てめーはいつもいつも！いい加減にしろよ！」と大声で怒鳴った。怒られたお兄ちゃんは、シュン…と今にも泣き出しそう。妹は、返してもらったおもちゃを持ったまま、おびえたような顔でお母さんを見上げていた。

気になるチェックポイント

- ・この親子のどんなところが気になる？
- ・子どもの様子で、気に留めるポイントは？
- ・躰か、虐待か？そう思う理由は？
- ・怒っているお母さんの気持ちはどうだろう？
- ・自分が同じバスに乗っていたら、どうする？

Ⅲ．結果

1. 学生群のグループワーク前後の比較

グループワークの開始前と終了後を対応のあるt検定で分析をおこなった結果、「身体的虐待」 $t(32) = 2.32, p < .05$, 「ネグレクト」 $t(32) = 3.33, p < .05$, 「性的虐待」 $t(32) = 2.66, p < .05$ に有意な差が確認され「心理的虐待」 $t(32) = 2.01, p < .10$ は、有意な傾向であった (Table 1)。

Table 1 学生群基本統計量および t 検定の結果

	Pre test			Post test			t 値
	n	平均	SD	n	平均	SD	
身体的虐待	33	27.55	5.36	33	30.42	6.57	2.32 *
ネグレクト	33	33.67	10.81	33	37.45	9.42	3.33 *
性的虐待	33	26.27	6.02	33	30.67	8.73	2.66 *
心理的虐待	33	32.73	9.34	33	34.73	8.70	2.01 †

† $p < .10$ * $p < .05$

2. 社会人群のグループワーク前後の比較

グループワークの開始前と終了後を対応のある t 検定で分析をおこなった結果、「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」「心理的虐待」すべて有意な差は認められなかった (Table 2)。

Table 2 社会人基本統計量および *t* 検定の結果

	Pre test			Post test			<i>t</i> 値	
	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>		
身体的虐待	20	29.30	3.90	20	29.05	3.97	0.59	<i>n.s.</i>
ネグレクト	20	41.05	7.01	20	42.00	5.30	0.11	<i>n.s.</i>
性的虐待	20	28.60	3.12	20	29.20	2.34	0.31	<i>n.s.</i>
心理的虐待	20	33.40	6.16	20	33.65	5.06	0.80	<i>n.s.</i>

3. 学生群・社会人基本統計量変化量の比較

学生群と社会人基本統計量におけるグループワークの効果を検討するために、それぞれの群に、各因子の値を介入後から介入前を引いて、この差を変化量とした。学生群・社会人基本統計量を独立変数として、下位尺度を従属変数とし、一要因分散分析を行った結果を Table 3 に示す。その結果、虐待認知の尺度の4つの因子のうち、3因子にて有意な傾向が認められた。「身体的虐待」($F(1,51) = 3.63, p < .10$) 「ネグレクト」($F(1,51) = 3.40, p < .10$) 「性的虐待」($F(1,51) = 3.04, p < .10$)。「心理的虐待」については有意な差は認められなかった ($F(1,51) = 1.36, p < .n.s.$)。

Table 3 グループワーク前後での変化量の分散分析結果

	学生群			社会人基本統計量			<i>F</i> 値	
	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>		
身体的虐待	33	2.88	7.02	20	0.25	2.10	3.63	†
ネグレクト	33	3.79	6.43	20	0.95	2.64	3.40	†
性的虐待	33	4.39	9.33	20	0.60	2.62	3.04	†
心理的虐待	33	2.00	5.62	20	0.25	4.43	1.36	<i>n.s.</i>

† $p < .10$

4. ロールプレイング群演者の検討

ロールプレイングの演者を対象のある *t* 検定で分析をおこなった結果、「身体的虐待」 $t(15) = 2.52, p < .05$ 、「ネグレクト」 $t(15) = 2.46, p < .05$ 、「性的虐待」 $t(15) = 2.54, p < .05$ に有意な差が確認されたが「心理的虐待」 $t(15) = 1.26, p < .n.s.$ は有意な差が認められなかった (Table 4)。

Table 4 ロールプレイングの基本統計量および *t* 検定の結果

	Pre test			Post test			<i>t</i> 値	
	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>		
身体的虐待	16	26.38	4.99	16	31.69	6.79	2.52	*
ネグレクト	16	35.81	10.94	16	40.56	8.56	2.46	*
性的虐待	16	26.94	5.14	16	33.69	7.84	2.54	*
心理的虐待	16	33.94	6.79	16	36.25	5.90	1.26	<i>n.s.</i>

* $p < .05$

5. テキストマイニングの検討

学生群と社会人群がグループワークで行ったKJ法で得られた意見を、テキストマイニングで90語が抽出された。そのうちどちらかに100%偏りがある単語を除く48語が抽出された。出現回数の多い単語を選び出し、それらが2群においてどれ位の比率で出現した結果をTable 5に示す。学生群は「引っ張る」「はしゃぐ」「ハイヒール」「楽しい」「ミニスカート」単語が上位であったが、社会人群は「言う」「怯える」「かまう」「いじる」「母親」の単語が上位を示した。また、学生群と社会人群が共通して使用した単語は、「怖い」「見る」「静か」であった。

Table 5 学生群と社会人群のKJ法抽出結果

学生群%	単語	社会人群%	学生群%	単語	社会人群%	学生群%	単語	社会人群%
19	言う	81	43	怒鳴る	57	56	かける	44
22	怯える	78	45	服装	55	60	うるさい	40
24	かまう	76	45	言葉づかい	55	60	座る	40
28	いじる	72	46	泣く	54	62	乗る	38
28	母親	72	46	しつける	54	64	バス	36
29	虐待	71	49	掴む	51	65	ふり	35
35	様子	65	50	怖い	50	67	注意	33
35	周り	65	50	見る	50	71	大声	29
35	怒る	65	50	静か	50	72	出す	28
35	思う	65	51	子ども	49	75	悪い	25
38	イライラ	62	51	携帯	49	76	聞く	24
39	見上げる	61	52	行動	48	77	ミニスカート	23
39	出来る	61	52	恥ずかしい	48	77	楽しい	23
39	お母さん	61	52	お兄ちゃん	48	79	ハイヒール	21
42	いい	58	52	言葉	48	82	はしゃぐ	18
42	気持ち	58	56	できる	44	85	引っ張る	15

IV. 考察

保育養成校に通う学生を対象に、身近な事例をロールプレイングで再現し、グループワークの効果を検討することを行った結果、まずは虐待認知の変化が認められた学生群とロールプレイング群について考察を加える。次に変化が明確に認められなかった社会人群の考察と、変化量の検討からの考察を行い最後に、テキストマイニング、共通して明らかになった課題を加える。

学生群のグループワーク前後の比較では、「心理的虐待」は有意な傾向であったものの、「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」における虐待認知は変化したことが明らかになった。学生同士がグループワークでディスカッションを行うことで、その相乗効果が認識に影響を及ぼしたと考えられる。上本ら(2014)の大学生の児童虐待の意識調査では、児童虐待問題に関心があるほど虐待行為を虐待であると認識していることから、保育士を目指す学生にとって児童虐待問題は関心があったことが示唆される。しかし、標準偏差のばらつきが多いことから、集団として変化したが全員が同じように考えていなかったことが考えられる。つまり、個人の

解釈に委ねられている部分があると推測される。

ロールプレイング群演者の検討では、「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」における虐待認知の変化が確認できた。台（2003）は、グループでの話し合いから行為的なやり取りに移りやすいだけでなく、問題をいっそう身近に感じることができ、他人の目で自分を捉え、また他人を援ける仕方を具体的に学ぶ機会が提供できると述べている。また、植草ら（2015）は、仲間とともに役割を取りながら活動を行った結果、他者や自分への気づきや、共感的なつながりが深まったことでお互いの立場を理解するといった自己成長の効果が得られると報告している。このことから、演者は与えられた役割を演じ感じたことで、児童虐待の問題をそれぞれの立場から、理解を深めたのではないかと示唆される。ただし、今後ロールプレイを行う際、治療場面とは異なるので、事例の内容によっては吟味する必要がある。

次に虐待認知の全ての因子に変化が認められなかった社会人群では、7割が子育て中の母親であることから、実際に育児をしていると、虐待と思われる項目でも、子育てしていたらこういうこともあると認識することが多いと推測される。鈴木ら（2002）の世代間伝達の関連研究で、母親から受けた養育態度の捉え方によって子どもの虐待の認識に差がみられたことを報告している。その背景には躰か虐待かの問題があり、李ら（2012）が保護者に行った調査では、母親自身が行った経験がない行為については、虐待と認識しており、母親自身が実際に躰として行った経験があるほど、主観的にも躰と認識しているか、あるいはどちらでもないという曖昧な認識を持っていることが報告されている。厚生労働省（2016）児童福祉法等の一部を改正する法律（平成28年6月施行）では、躰を名目とした児童虐待の禁止が明記された。このように、躰の行為が結果的に子どもの発育や発達に悪い影響を与えているならば、それは児童虐待とされる。大人側の事情ではなく子ども側の視点から、親の行為が子どもにどのような影響を与えているかによって判断されることの認識を高める必要がある。

学生群と社会人群におけるグループワークの効果の変化量を比較した結果から、学生群は社会人群に比べて有意な傾向であったが、明確な効果は得られなかった。個人の生まれ育った環境や解釈に委ねられるため、グループディスカッション後も虐待認知の認識はあまり変わらなかったことが推測される。また、現在認識している信念は、1回だけのグループワークでは困難であることが言える。中嶋（2005）が報告したように虐待に関する知識からの認知というより、項目に挙げられた現象そのものに対する認知が、虐待の範疇として認知されにくいことも考えられる。

最後に学生群と社会人群がグループワークで行ったKJ法で得られた意見を、テキストマイニングで90語が抽出された。その特徴は、学生群は服装や場面の単語が多く抽出されたが、社会人群は動作、状態などの概念を表す動詞の単語が多く抽出された。ここからも注目している視点が異なることが考えられるが、テキストマイニングについてはさらに検討が必要である。

今回の研究で共通して明らかになったことは、「心理的虐待」に虐待認知の変化が認められなかったことである。2016年厚生労働省が発表した、児童相談所が児童虐待相談として対応した件数の中で、「心理的虐待」が急増した要因として、配偶者に対する暴力（DV）から、警察

への通告が増加していることを報告している。また、児童相談所全国共通ダイヤルの広報、マスコミによる児童虐待の事件報道等により、国民や関係機関の児童虐待に対する意識が高まったことに伴う通告の増加が要因とされている。宮村（2014）が行った先行研究でも、「性的虐待」「心理的虐待」に虐待認知の変化が認められ「心理的虐待」については異なる結果になった。その研究では、3人の専門家の立場からの講演を受けた後に、グループディスカッションを行ったことから虐待認知に何かしらの影響があったと考えられる。

一方、単純な比較は難しいが中嶋（2005）が参考にした、高橋ら（1995）のビネット調査を用いて、大学生とその母親を対象に行った虐待意識の研究では「心理的虐待」はいずれも変化が認められなかった報告がある（八重樫 2005）。2004年「児童虐待の防止等に関する法律」一部改正、第2条の児童虐待の定義では、虐待防止対策の強化が図られ、虐待の定義の明確化された。しかし、「心理的虐待」についての定義が難しく、何をもって「心理的虐待」とするのかについては多く議論されている（石川、2006；池、2006）。そのため身体に傷ができる身体的虐待と異なり、形にみえない「心理的虐待」は、子どもにはっきりとした影響が出にくく、その心の傷はとても深いと考えられる。小宅ら（2006）は、他の虐待より軽視される傾向にある「心理的虐待」は後に、日常生活がままならないほどの心理的損傷や社会的損傷を生じさせる影響力があり、子どもの福祉の観点からはこの「心理的虐待」が「人権侵害」に値すると深刻に受け止める必要があると指摘している。一見すると子ども自身の問題と捉えられがちだが、「心理的虐待」による自己肯定感の低下で、児童の不登校や自傷行為などの形で影響が表れてくる場合もある。つまり、「心理的虐待」は目に見える影響が出にくい分、それぞれの家庭の育児方針や育児観で、評価も左右されやすいため、グループワークにおいても虐待認知の変化が認められなかったことが考えられる。

今後は、「心理的虐待」にアプローチできる、ロールプレイングを取り入れたグループワークプログラムの開発が必要である。特に子育て中の母親に対して認知に働きかける虐待防止プログラム開発を検討することが重要である。さらに、虐待には重複性があるため項目別の検討や尺度開発を期待したい。

付記

本論文は、日本健康心理学会第29回大会で発表したものに、加筆致しました。ご協力いただいた皆様に心より御礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 東俊一（2006）．児童虐待の早期発見・予防に関する保育士の意識調査 日本教育心理学会総会発表論文集（48），25．
- 池弘子（2006）．心理的虐待の定義に関する検討 聖学院大学論叢 19(1)，33-46．
- 石川義之（2006）．心理的虐待の実態[]：大阪コミュニティ調査報告書 大阪樟蔭女子大学 人間科学研究紀要 5，123-152．
- 釜賀誠一（2015）．テキストマイニングを用いた授業評価の自由記述の分析と対策 尚綱大学研究紀要．

- A, 人文・社会科学編 (47), 49-61.
- 上本めぐみ・李璟媛 (2014). 教員養成課程の大学生における児童虐待に関する意識 兵庫教育大学教育実践学論集 第 15 号, 13-26.
- 笠原正洋 (2009). 保育士養成における虐待対応についての教育プログラムに関する予備調査 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 (41), 25-34.
- 厚生労働省 (2013). 子ども虐待対応の手引き (平成 25 年 8 月 改正版)
- 厚生労働省 (2016). 平成 27 年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数 (速報値)
- 厚生労働省 (2016). 児童福祉法等の一部を改正する法律 平成 28 年法律第 63 号
- 小宅理沙・石川義之 (2006). 心理的=情緒的虐待に関する実証的研究-大阪コミュニティ調査報告 日本社会病理学会第 22 回大会.
- 李璟媛・山下亜紀子・津村美穂 (2012). しつけと虐待に関する認識と実態: 未就学児の保護者調査に基づいて 日本家政学会誌 63(7), 379-390.
- 宮村りさ子 (2014). 健康心理学会のアプローチによる児童虐待の減少と防止への取り組み 日本健康心理学会ヘルス・サイコジスト NO.64.
- 中嶋みどり (2005). 保護者における児童虐待の認知の特徴と発達心理学的要因の検討 発達心理学研究 16(1), 72-80.
- 鈴木祐子・刀根洋子・木村恭子・及川裕子 (2002). 男女別による子ども虐待の認識と世代間伝達の関連: ビネット調査と PBI 測定から 日本赤十字武蔵野短期大学紀要 15, 25-30.
- 高橋重宏・庄司順一・中谷茂一 (1995) 「子どもへの不適切な関わり (マルトリ-トメント)」のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究 (2) 新たなフレームワークの提示とビネット調査を中心に 日本総合愛育研究所紀要 (32), 87-106.
- 植草一世・大木みわ・木下勝世・鈴木朱美・石川明子・平野有佳子・伊藤鉄夫・時田学 (2012). 保育者の専門性を高めるロール・プレイング活用 植草学園大学研究紀要 4, 27-36.
- 植草一世・安藤 則夫・馬場 彩果 (2015). ロール・プレイングを活かした物語作りの意味: 教員 (保育者) 養成における専門性を高めるために 植草学園大学研究紀要 7, 47-57.
- User Local, <http://textmining.userlocal.jp/>, 2016.8.22
- 台利夫 (2003). ロールプレイング 日本文化科学社
- 八重樫牧子 (2005). 大学生とその母親の児童虐待意識の関連性 川崎医療福祉学 14(2), 415-423.